

英大使館跡地から弥生時代の集落 説明会開かずマンション建設へ

毎日新聞 2023/12/4 06:30

□



英國大使館跡地での発掘調査の様子 = 2023年10月25日、川上晃弘撮影

写真一覧

東京都千代田区一番町の英國大使館跡地から弥生時代の集落跡が見つかったことが千代田区への取材で分かった。見つかったのは三菱地所レジデンス（東京都）などが再開発を進めている土地で、縄文時代のものも含めこれまでに堅穴住居跡が28棟確認された。ただ、遺跡として現地に残すことは難しい見込みで、調査後に埋め戻されてマンション建設が始まる予定。現地説明会も開かれない。都心における遺跡活用の難しさを改めて浮き彫りにした。

千代田区などによると、10月下旬までにこの土地で見つかった弥生時代後期前半（1～2世紀）の堅穴住居跡は21棟。縄文時代のものも3棟あり、そのうち1棟には貝が残っていた。時期が不明の堅穴住居跡も4棟あった。弥生土器や縄文土器も出土し、近世の上水木樋（もくひ）や井戸、地下室なども確認された。

調査は 2024 年 3 月まで行われる。調査対象となった約 7700 平方メートルのうち、まだ約 3700 平方メートルしか調べておらず、新たに遺跡が見つかる可能性が高い。

明治大の石川日出志教授（考古学）は「都心で発見されたことに驚いた。そもそも弥生時代後期前半において、これほど住居数のある集落が発見された例は関東南部ではほとんどない。当時の暮らしぶりが分かり、学術的にも重要だ」と話す。



東京都千代田区一番町の英國大使館跡地で発掘された弥生時代の竪穴住居跡＝千代田区提供

[写真一覧](#)

千代田区も今回の遺跡を重大な発見とみているが、現時点で国が指定する史跡相当の発掘とは言えず、発掘内容を記録した上で遺跡を埋め戻す方針だ。

一方、千代田区と三菱地所レジデンスは遺跡の一部だけでも残すことや、**発掘を公表した上で現地説明会を開くことについて協議を重ねた**。しかし、**同社の同意を得られず断念**した。発掘された遺跡

の取り扱いは開発業者や地権者の意向が最優先される。同様のケースは少なくないという。

遺跡調査の費用は原則として開発業者などが負担することになつており、今回も三菱地所レジデンスが払っている。三菱地所の広報担当は「法や条例にのっとり行政と相談しながら対応している」としている。



三菱地所レジデンスに敷地の一部を売却した英国大使館 = 東京都千代田区一番町で 1 日、川上晃弘撮影

三菱地所レジデンスは 22 年 4 月、英国から英国大使館の南側の土地（9259 平方メートル）を購入し、別の不動産会社などと共に再開発に乗り出した。

この土地については明治時代初めから掘り起こし工事が未実施で、何らかの遺跡が残っている可能性が指摘されていた。そのため、千代田区が三菱地所レジデンスの同意を得て **23 年 2 月に現地を試掘したところ、縄文時代や弥生時代の遺跡があることが判明。** マンション工事は延期され、**同 6 月から本調査が始まっていた。**
【川上晃弘】

皇居に面した好立地 遺跡の上に建つのは富裕層向け「超・億ション」



遺跡調査が行われている英國大使館跡地の車両出入り口。塀の外側からは内部の様子は分からぬ = 東京都千代田区一番町で 1 日、川上晃弘撮影

東京都千代田区一番町の英國大使館跡地は、皇居のすぐそばに位置する。土地を取得した三菱地所レジデンスなどが再開発を進めているが、現在は遺跡が出たことにより工事は行われていない。好立地を生かし、この場所では超富裕層を対象にした分譲マンションの建設が計画されている。

出土した弥生時代の集落跡の写真は[こちら](#)です。

【関連記事】

[英大使館跡地から弥生時代の集落 説明会開かずマンション建設へ](#)

同社は詳細を明らかにしていないが、住民への説明などによれば、**建設されるマンションの高さは 60 メートル（20 階建て相当）**ほどで、地下部分も設置されるという。

英國大使館は皇居に面し、桜の名所として知られる千鳥ヶ淵公園の目の前にある。



英国大使館の目の前にある千鳥ヶ淵公園。春には桜が満開となり、多くの人が訪れる。公園の奥側に皇居がある = 東京都千代田区で

不動産経済研究所によると、2023年度上半期（4～9月）の新築マンション1戸当たりの平均価格は、東京23区で1億572万円となり、初めて1億円を超えた。

神奈川県（5771万円）や埼玉県（4958万円）などに比べてかなり高価だが、**今回建てられる予定のマンションはさらに別格だ。**

地元の不動産会社の担当者は「**皇居の目の前**という立地から考えて二度と出ないような物件。価格は億ションというレベルを超えたものになるだろう。1部屋当たりの面積も広く、富裕層の外国人を対象としたものになるのではないか」と話す。

千代田区によると、もともとこの土地は江戸時代から武家屋敷として利用されており、旗本などが住んでいた。**当初は6軒の屋敷**に分かれており、徳川家康に仕え「天下のご意見番」として知られる大久保彦左衛門の子孫の大久保忠直の屋敷もあった。

1700年を過ぎると、これら土地を統合して二つに分け、**大和新庄藩**（奈良県）や**七戸藩**（青森県）など1万石程度の藩主の屋敷などとして使われるようになった。

明治維新を経て、二つの土地を合わせて英國公使館となり、公使館は1905年に大使館に昇格した。23年の関東大震災で敷地にあつた赤レンガ造りの建物が崩壊したが、29年に再建されたという。



英國大使館から敷地の一部が日本に「返還」され、現在は市民の憩いの場となっている國民公園
皇居外苑半蔵門園地

大使館の敷地は約3万5000平方メートル。土地は日本が所有し、英國大使館は賃料を払う形がとられていた。しかし、2015年8月、日本と英國の間で、大使館南側の約7000平方メートルの敷地を日本に「返還」するかわりに、残りの敷地の所有権を英國側が持つ契約が締結された。

さらに22年4月、英國大使館は三菱地所レジデンスに9259平方メートルを売却。同社は23年3月に持ち分の35%を別の不動産会社などに移転した。

日本に返還された土地は國民公園皇居外苑半蔵門園地となり、近隣住民の憩いの場となっている。【川上晃弘】